灰かぶり君 =前篇=

渡里あずま

灰かぶり君 =前篇=

渡里あずま（表紙　inika）

シンデレラってさ

色々と、苦労したと俺は思う。

あ、俺が言うのは魔法使いと会う前じゃなく、後の話な？

いくら美人で、教養があっても（そうじゃないとぶっつけ本番で王子と踊れないよな？）平民が、一国の王子に見初められて。ロイヤルファミリー入りするプレッシャーって本当、半端ないと思うんだ。何しろ元々が、かまどで灰まみれになりながらも働いて、ネズミとか鳥と仲良くなるような大人しくて素朴な娘なんだから。

……めでたしめでたし、だったのかな？

格差婚って、愛の力で乗り越えられるものなのかな？

王子が守って……いや、でもあいつ、元凶だからな。魔法使い！　責任取ってフォローしてやれよ！

イマココ

1＋1は2。
太陽は東から昇り、西へ沈む。人は生まれて、いずれ死ぬ。
そんな風に、世の中には絶対にありえないって言うか、覆らないことってあると俺は思う。
……そう、例えばなんだけど。
新作のネタって言うか、資料として色々、読ませて貰いはしたけどさ？

「僕の笑顔を見破るなんて……気に入りましたよ、真白（ましろ）」
「何言っ……んんっ!?」

仮に俺達に気づいていないとしても、朝っぱらから男（眼鏡）が、同じ男（眼鏡でボサボサ頭）にキスしたとすると。
「痴漢……変質者？」
どちらがより的確かは悩むが、見てしまった者に悪印象を与えるのは間違いない。そう、ちょうど今の俺に対してみたいに。
「このっ……ふざけんなっ！」
怒声、次いで鈍い音。
俺の不快感は次の瞬間、キスされた方が相手の腹に見事な蹴りを叩き込むのを見て、スッキリ解消された。

そんな俺に気づくことなく、モジャ男――は酷いか、王道君は足早に立ち去った。蹴られて吹っ飛び、気絶した犯罪者――副会長？　を残して。

出迎えた副会長が、鬘と眼鏡で変装した王道転校生に偽笑顔を見破られ、嬉しさのあまりキスする――以上、王道学園物のお約束だ。

（そうか。出迎えイベントでの王道君の反撃は、この爽快感の為に必要なんだな）

読んだ時は過剰防衛じゃないかって思ったけど、可愛い我が子に手を出された書き手としては、中途半端だとむしろイラッとする。成程、と納得した俺はまだ気を失ったままの副――解らないから変態でいいか、の元へ駆け寄った。流石に、外に放置はまずい。

そして肩に担いで校舎へ連れて行こうとしたら、今まで黙ってた守衛さんから声をかけられた。

「おい、チビが無理すんな。俺が、運んでおいてやるし……ちゃんと、お前のことも伝えておくから」

紺色の警備服に身を包んだ守衛さんは、二十代後半くらいだろうか？　黒髪短髪の、精悍なイケメンさんだった。担いだ変態も、顔だけは綺麗だし――流石、金持ち＆美形で構成され、リアル王道学園って噂されるだけはある。

……そこまで考えて、俺はあることに引っかかった。断っておくが、チビってところではない。悔しいが、事実だからだ。

（守衛さんに運ばせる？　この変態に、俺のことを伝える……自分が楽して、金持ちのボンボンに恩売るとか、そういう意味か？）

思いがけないことを言われて、俺は首を傾げた。そんな俺に、守衛さんもまた首を傾げる。年上だけど可愛いな、おい。

とは言え、いつまでも無言でコントも何なので俺は答えた。

「守衛さんは、仕事中ですよね？　だったら手が空いてる俺が、運びますよ……って言うか、伝える必要ないです。むしろ、気絶してるうちに運びたいんで、失礼します」

放っておいて恨まれるのも、知られて色々勘ぐられるのも困る。だからそう続けたら、何故か守衛さんが噴いた。忙しい人だなぁと思いつつ、肩の変態を引きずって行こうとしたら、不意に軽くなる。

驚いて顔を上げると、守衛さんが変態を軽々と横抱きにして口を開いた。

「巡回の『ついで』に運ぶから、大丈夫……お前は、さっきの奴追いかけろよ。同じ転校生だから、行き先はお前も行く理事長室だ」

「……ありがとう、ございます」

ここまで言われたら、断れない。仕事を増やして申し訳ないが、俺は素直に守衛さんの言葉に甘えることにした。お礼を言って下げた俺の頭を、守衛さんが撫でてくる。

「どう致しまして……俺は、岡田黒江（おかだくろえ）だ。外部生は、馴染むまで大変だろうから……愚痴言いたくなったら、いつでも来い」

すごいな。守衛だけじゃなく、生徒の心のケアまでしてるのか――保険医の仕事じゃないかと思うが、まあ、好意はありがたく受けよう。

守衛さん――岡田さんにもう一度頭を下げて、俺は王道君を追いかけた。

（言動までイケメンな岡田さん、ありがとう。お礼に、カッコ良く書い……って駄目か、ホモにしちゃ）

でも、守衛攻めってあんまり聞かないよな、などと考えていた俺には、岡田さんの呟きは聞こえてなかった。

「面白い奴だな……気に入った」

王道君を追いかける俺、その目に飛び込んできた風景。

視界に入りきらないくらい、だだっ広い敷地。
そしてその先には、洋風の城（日本のだと、それはそれで驚くけど）としか思えない学校。
良家ご子息御用達の全寮制男子校・白月学園にどうして平凡庶民な俺・谷出灰（たにいずりはは）が通うことになったのか。
……それは、数日前まで遡る。

平凡庶民って言ったけど、俺には一つだけ普通と違うところがある。それは『職業・ケータイ小説家』ってことだ。
あ、サイトで書いてるだけじゃないぞ？　ありがたいことに中三の冬に書籍化が決まり、同じシリーズで更に二冊出版して貰ってる。
……良家のお嬢様が通う、ミッション系学園。
そこでのお嬢様達の日常を書いたら、ありがたいことにサイトで評判になった。ちょうど百合系雑誌とか、漫画が流行ってたせいもあると思う。
ただし俺はさっきも言った通り百合、つまり女の子同士の恋愛は書いてない。限りなく恋愛に近いとは言われるけど、年齢的にも経験値的にも乏しい俺にはむしろ踏み込んだ話は書けないと思ってる。
（百合化された、薄い本は出てるらしいけど）
だから俺としては、キラキラしたファンタジーのつもりで書いてたんだけど――数日前、俺の担当である桃香（ももか）さんから思いがけないことを言われた。
「実は、出灰君に新作を書いて欲しいの」
「えっ……」
「昨日、デリ☆（スタ）で後期スケジュールが出たでしょ？」

『デリ☆』って言うのは、俺が小説を投稿してるサイトだ。スター出版って会社が運営してて、今まで数多くの小説が書籍化されたり、漫画化されたりしてる。
そのきっかけになるのが、隔月で行われてるイベントだ。書き手がテーマに合わせた作品で参加し、スター出版の人達が目を通して書籍化作品を決めている。
ちなみに、書籍化した書き手には俺みたいに担当さんがつく。まあ、俺だけじゃなく複数の書き手を担当してる訳だけど。
（……あれ？）
そこで俺は、あることに引っかかった。
確かに五月になり、後期スケジュールが出てたけど――一昨年、俺が参加した『少女小説』イベントは無かった筈だ。
「桃香さん。俺、ホラーとかオフィスラブって書いたことないですよ？」
「もう、やーね。出灰君ってば、天然なんだから。ほら、もう一つあったでしょ？」
……もう一つって言われて、思い出しはした。
だけど嘘だと思いたかったので、冗談めかして聞いてみた。
「まさか、ボーイズラブな訳ないですよね？　アハ」
「まさか、からのボーイズラブよ。出灰君！」
グッと親指を立て、すっごく良い笑顔で言われたのに俺は口を「ハ」の形にしたまま固まった。
そして、言われた内容を理解したところで――首と手の両方を、思いきり横に振った。
「い……や、無理です。無理無理無理っ！　勘弁して下さいよっ」
「そんなことないわよ、お嬢様を金持ちイケメンに置き換えれば」

「あります！　女の子だとスキンシップで済んでも、男でやったら暑苦しいじゃないですか！　それにボーイズラブって、スキンシップだけで終わらないしっ」
小説概要で『微エロ』とか『裏あります』って見た。それを男の俺が書くって、セクハラかよ！
そりゃあ、女の子からすると俺の書く話もありえないって、ツッコミどころ満載だろうけど。俺は、夢を見ていたい。そう、色んな意味で。
「うんうん、夢見ててもいいわよ出灰君」
「無視！　そして心、読んだんですか!?」
「でも、今回お願いしたいのは『体験取材』だから……男の子で、高校生の出灰君にしか頼めないのよ」
「……は？」
「白月（しづき）学園って知ってる？　幼稚園から大学までの、エスカレーター式名門校。勉強に専念出来るように、人里離れたところにあるけど……一部の人間には『リアル王道学園』って呼ばれてるわ」
「王道？」
「人里離れたところにあって、中等部からは全寮制の男子校。閉鎖的で同性愛に発展しやすいから王道、つまりはお約束って訳」
眼鏡のブリッジをクイッと上げて、桃香さんは話し始めた。肩までの黒髪とスーツ。見た目はクールビューティーだけど、口を開くとパワフル――慣れはしたけど本当、見た目とギャップのある女（ひと）だ。
「で、そこの理事長が大学の同級生なんだけど……この前、甥っ子を転入させることになったって相談を受けたの」
相談って、何か問題でも――俺はそう続けようとして、やめた。全く知らない相手について、いきなり踏み込んじゃいけないと思う。

だけど、そんな俺の気遣いを余所に桃香さんは話を続けた。
「んー、子供の頃は病弱で学校通ってなかったのと……高校に入ってからは、暴力事件で四校退学ですって。そんなところも、王道転校生よね」
「……それも、お約束なんですか？」
「そうよ。でも、見た目は美少年なの。そんな王道君だけだと不安だから、誰か一緒に転入してくれる子がいないかって」
バイオレンスな遍歴と美少年と言う単語が結びつかず、眉を寄せた。不良と美形。それぞれ魅力があるだろうが、どちらか一つでは駄目なんだろうか？
一方、そんな俺の困惑には構わず、桃香さんは更に先へと進める。
「幸いって言うのも何だけど出灰君、今、学校行ってないでしょ？」
「……資格は、取りましたよ？」
そう、桃香さんの言う通り、俺は高校に通ってない。
実は書籍化の話と同じ頃、中三の冬に母親が死んだ。父親も早くに亡くなっていて、天涯孤独。遺産は残してくれてたけど、進学するより書籍化に没頭したくて高校には行かなかった。もっともずっとケータイ小説家を続けられるとも思ってないんで去年、高卒資格は取ったけど。
「それに、そんな坊ちゃん校に通うようなお金ないです」
「大丈夫！　試験結果では、余裕で特待生ですって」
「試験なんて俺、受けてな」
「あぁ、この前、親戚の子の受験勉強に使うって言ってヘルプしたでしょ？　あの過去問って言ってたのが、編入試験♪」

「……」

「あ、このアパートと仏壇については私が責任を持って管理するから。出灰君は安心して、王道君を主人公にした王道学園物を書いてちょうだい！」

騙し討ちか。そして金と家の話で駄目なら、他に断る理由がない。逆に『体験取材』なら自分で一から考える訳ではない。それが書籍化を検討されるのなら、むしろ俺にとっては得な話だ。

（精神的には無茶苦茶、キツそうだけどな？）

暴力的な王道君に、金持ちの坊ちゃん達――そんな濃い連中と学校だけでなく、寮でも一緒だなんて。

「……禿げる」

そう呟いて、俺はガックリと肩を落とした。

※

王道君の転入に合わせて、俺は光熱関係の手続きをした。桃香さんが管理するとは言え、年に二回の休み以外使わないからだ。

卒業まで一年以上空けることにはなるけど、このアパートを手放す気はなかった。亡き両親の思い出が残ってる――だけじゃなく。すぐに、俺がお払い箱になる可能性があるからだ。

（王道君が退学になったら、そこで終わりだよな）

桃香さんの話によると、暴力事件って言っても王道君が自発的に起こした訳じゃなく、誰かを助けようとしたり複数から喧嘩を売られてやむを得ず、らしい。

（ただ、その理由だと……懲りてないよな、多分）

本人が反省してないからこその結果が、四校の退学である。いっそ、最初から白月学園に入っていればと思ったが、本人が普通の学校に通うことを熱望したらしい。

（悪い奴じゃないんだろうけど、甘いって言うか……世間知らず？）

そこまで考えて、俺はガラケーを手に取った。スマホにも惹かれるが、布団に寝転がっての読書だとガラケーの方が楽だ。

転入準備の合間に、デリ☆で桃香さんに薦められた王道学園物を読んでいる。

どうやら変装（鬘に眼鏡）はほぼ必須だが、王道転校生には二つのタイプがあるらしい。一つは、訳ありの愛されキャラ。もう一つはアンチと呼ばれ、愛されるのが当然と思ってる困ったちゃんだ。切り分け方としては、下の名前呼びを強要するかどうからしい。

（名前呼び、ねぇ）

桃香さんに呼ばれてはいるけど基本、下の名前を呼ばれるのは苦手だ。平凡な見た目に似合わない、変わった名前だからだ。

（……それに）

実は、この名前呼びについてある疑問がある。

（明日、王道君に聞いてみよう）

そう結論づけると、俺はネットを切ったガラケーを枕元に置き、目を閉じた。

そして次の日、つまりは今日の昼に俺はバスで白月学園へと到着した。

王道学園物を読んでると、朝に着いてそのまま授業に出てる。けど、人里離れた山の中にあるのでそれは無理だった。ここの導入部は、リアルにするか様式美にこだわるか桃香さんと相談しよう。

「……でかい」
そして俺は門を見て、王道転校生のようなことを呟いてしまった。いや、だって本当、無駄にでかいしデザイン凝ってるんだよ。
（王道展開だと閉まってる門に文句言って、飛び越えるんだよな）
とは言え、俺はどっちもしない。
敷地内に寮も学校もあるから、むしろ閉まってるのがセキュリティ的に当たり前だし。アスリートじゃないんで、三メートルくらい高さがある門を飛び越えるのも無理だ。
だから俺は正門の左少し横、塀にひっそりとある通用門へと向かった。それから、そこにあるカメラ付のインターホンを鳴らして「はい」と聞こえてきた声に答えた。
「二年に転入する、谷です」
「あぁ、お前が……もう一人には、会わなかったか？」
「はい」
そう、不思議なのはバスで王道君に会わなかったことだ。
朝・昼・晩の三本しかないから、もう着いたんじゃなければ一緒だと思ったが――授業は明日からだから、ギリギリに来るんだろうか？
「今、開ける」
通用門越しの立ち話も何だと思ったのか、その言葉と共にカチンと音がした。
そして、開けて貰った通用門から中に入ろうとしたら――。
「デカ……ってか、閉まってるのかよ」
車のドアが開く音と、男にしては高い、澄んだ声が聞こえた。

まさか、と思いつつ声の方へと目をやって、俺は固まった。
来た方向へと走り去る高級車。
その車から降り、正門に気を取られて俺に気づいていない声の主――モジャ男君。
（……うわー、あんなんなんだー）
ボサボサの黒髪と、瓶底眼鏡。確かにアレだと下の素顔なんて解らないし、毬藻や毛玉なんて呼ばれもする。
（王道的には髪とか目の色が珍しい、美少年らしいけど）
くり返すが、素顔は解らない。って言うか、頭と眼鏡のインパクトが強すぎてその下の顔まで頭が回らない。
……何てことを考え、呆然としていた俺の前でモジャ男君が担いでたバッグを門の向こうに放り投げた。
そして、少し下がり――助走をつけて走り、軽々と門を飛び越えたモジャ男君を追いかける為、通用門を慌てて潜った。
（ちょっ、オリンピック出れるぞ!?）
恐るべき身体能力に内心、ツッコミを入れながら中に入ると――出迎えらしい眼鏡が、何やらモジャ男君に話しかけてた。
その内容はよく聞こえなかったが、パターン的には役職付きの自己紹介と、転校生の名前の確認だろう。今回は二人いるしな。
それに対するモジャ男君の声は、不思議なくらいハッキリと聞こえた。
「オレは、北見（きたみ）真白……なぁ、無理して笑わなくてもいーぞ？」
（……へぇ）
作り笑いをズバリ「気持ち悪い」って言わない、マイルドな対応もだけど。元凶が言うなって見方はあるが、スルーしないでいっそ突っ込めって言ってるなら意外と真っ当かもしれない。

天然と生真面目、どちらともとれるけど、さて作り笑いを指摘された眼鏡はどう出るか。
……まあ、この後のリアクションは王道通りであり、現実としては痛かった。
「僕の笑顔を見破るなんて……気に入りましたよ、真白」
そう言って、眼鏡がモジャ男――いや、王道君にキスをする。
そして冒頭に戻り、俺は王道君を追いかけながら考えた。
（早くも一人、陥落か……でも）
無理してって王道君は言ってたが、作り笑い自体は別に悪いことじゃないと思う。周りと円満に接する為には有効な手段だからだ。
非王道だと、余計なお世話だって突っぱねる場合もあるみたいだけど――あの変態は、素直に落ちたみたいだな。
（それにしても、あの状況って）
強烈な出来事の連続に、吊り橋効果が働いたんじゃないかって分析をした――俺、イマココ。

自己紹介、自己紹介、自己紹介

「……あのっ」

岡田さんのおかげで、俺は王道君に何とか下駄箱で追いつくことが出来た。

さっきの会話で名前は聞こえていたが、何て呼んでいいのか解らなくてとりあえず声をかけるだけにする。すると、振り向いた王道君がボサボサ頭を不思議そうに傾げた。

「あ、俺、お前と同じ、転校生」

「へぇ、お前が！　オレ、北見真白。お前は？」

「谷出灰」

「そっか！　なぁ、真白って呼んでくれよ。お前のことも、出灰って呼んでいーか？」

「やだ」

良かった、アンチじゃない（名前呼びを強要されなかったから）みたいだ。作者として、主人公には（たとえ男でも）可愛くあって欲しい。

一安心したところで、俺は名前呼びを拒否した。そして断られて固まる王道君に、俺はある質問をぶつけてみた。

「下の名前、変わってるから恥ずかしいんだ。だから、俺のことはあだなで呼んでくれないか？　イズとかいっくんとか」

「えっ……」

下の名前呼びにこだわるが、親しさの象徴ならあだなの方が上じゃないだろうか？　現に、王道学園物のチャ

ラ男とか双子とかはあだな呼びだし。
そう思って王道君を見ると、耳まで真っ赤になっていて驚いた。そんな俺の前で、王道君が口元を手で覆って言ってくる。
「……悪い。ちょっと、いきなりは無理」
「そうか。じゃあ、谷で……お前のことは、真白って呼ぶな」
「おう、よろしくな、谷！」
俺が下の名前で呼ぶと、王道君――真白は嬉しそうに俺の手を握り、上下に振った。
（……人懐っこく見えるけど、照れ屋？　ってか、友達つき合いに慣れてない？）
疑問に俺なりの答えが見つかったところで、俺の名前呼びイベントは終了した。

下駄箱で、真白に追いついて良かった。俺がそう思ったのは、同じ地図の載ったパンフレットを手にした状態で、真白が反対方向に進もうとした時だった。
「よく校舎まで迷わなかったな」
「だ、だって、デカイの見えたしっ」
「そうか」
目印がないとアウトな方向音痴か。流石、愛されキャラ。
赤面する真白の力説を流しつつ、俺は理事長室へ――正確には、理事長室のある階に昇る為の、エレベーターへと向かった。
地図によると、職員室と各学年の教室が三階まで（ここまでは階段使用）そこから上、四階は風紀委員と生徒会の、五階は理事長のエリアだそうだ。

四階以上は普段、一般生徒には解放されてないけど、今回は転校初日なんで届いてたカードをかざして、エレベーターを使うことが出来た。
（さて、最上階のラスボスに会いに行くか）
ゲームみたいだけど、あながち間違っていないだろう。もっともラスボス、もとい理事長はすでに、甥の真白に落とされてるけどな。
（心配で、わざわざオトモダチ用意するくらいだし）
あ、断っておくけど嫌味じゃない。むしろ、手間隙かける愛情には素直に感心する。
そこまで考えて、俺は真白が高級車らしきものに乗ってきたことを思い出した。理事長が用意した？　それとも、真白の家も金持ちなのか？
「真白って金持ちなのか？」
「えっ⁉　いや、フツーフツー！　ってか、谷だって……」
「俺、特待生」
疑問に思って尋ねたが、何となくうやむやになった。それより『特待生』と言った瞬間、瓶底眼鏡で見えない筈の真白の目が輝き、全身からキラキラオーラが放たれて驚いた。
「オレ……オレも、特待生なんだ！　うわ、スゲェ嬉しいっ」
そう言って、また俺の手を握って上下にブンブンと振る。面倒なのでされるがままになりながら、俺は真白とエレベーターに乗った。
……真白は『普通』と『友達』にこだわってる。だから、どっちにも当てはまる俺に構うんだろう。
（特待生ってことは、クラスも多分同じだよな）
観察するには好都合だけど、面倒に巻き込まれるかもしれない。一瞬、そう思ったけど俺はすぐにその考えを

打ち消した。
（まっ、もう巻き込まれてるからな）
王道学園物を読む限り、巻き込まれるともれなく親衛隊――イケメン達のファンクラブから、呼び出される。警告で済めばいいけど、制裁って名の私刑もあるらしい。
真白と違って、俺は運動神経も普通だし喧嘩もしたことがない。小説が書けなくならないよう、手の怪我だけは気をつけよう。ささやかな決意を抱くと俺はエレベーターを降り、門同様に豪華な理事長室のドアをノックした。
「失礼します。転校生の北見と谷です」
「どうぞ」
そして促す声を受け、中に入ろうとしたら――いきなり抱き着かれて、ちょっと驚いた。
「伯父さん！　何、やってんだよ⁉」
「真白？　あぁ、谷君すまないね。間違えてしまったよ」
「……いえ」
「解ったんなら、離れろ……ってば！」
すっぽり腕に収まった俺の代わりに、真白が理事長を押し退けてくれた。
まあ、俺としては理事長と王道君のハグを体感出来たんで、申し訳なく（主に理事長に）は思うけど別に怒ってはいない。
……と、真白が不意に硬直する。
（そっか。真白は俺が、理事長の紹介で来たって知らないのか）
そんな俺の前での『伯父さん』発言等に、今更ながらに焦ってるんだろう。社会を生き抜けるかどうかはとも

かく、主人公キャラとして正直者はありだと思う。
「……伯父さんって真白、もしかして理事長と親戚なのか？」
「ふぇっ？　う、うん、隠してててゴメンな、谷！」
だから俺は、わざとらしく質問してこの場を収めた。あまりにも簡単に騙されるのに、ちょっと真白の将来が心配になった。
それにしても理事長、白々しいのは自覚してるんで、笑いを堪えるのはやめて下さい――岡田さんもだったけどこの学校、笑い上戸が多いな、オイ。
「改めて、白月学園へようこそ。私が、理事長の海道白馬（かいどうはくま）だ」
俺達が来客用のソファに座り、美人の秘書さん（男）が紅茶を出してくれたところで理事長の話は始まった。
「ここは幼稚園から大学までの、エスカレーター校だ。受け入れていない訳ではないが、君達のような外部生はほぼいない」
だろうな、って理事長の説明を聞きながら思う。
ここは学費等がバカ高いから、特待生制度を使わないと一般人にはまず通えない。そして特待生は、学年五位以内をキープしなくちゃいけない――無料って、やっぱり大変だよな。
「だからこうして、外部生とは話し合いの場を設けている……狼の群れの中に、いきなり子羊を放り込むのも不憫だからね？」
おお、このタイミングか。確かに、これからの話は学校案内のパンフレットには書けないよな。
内心、感心した俺の横で真白が不思議そうにボサボサ頭を傾げる。
そんな甥っ子の様子を知ってか知らずか、理事長はおもむろに話を切り出した。
「男ばかりの閉鎖した空間のせいか、我が校では同性愛に走る生徒が多い。ゲイとバイで九割で、ノーマルは一

割だね」
「なっ……何だよ、それ!?」
驚いて立ち上がる真白の横で、俺は紅茶を飲んだ――美味い、出来るな秘書さん。
「って、何で驚かないんだよ、谷！」
そんな俺に真白が、ある意味当然なツッコミを入れてきた。
とは言え、俺には俺の言い分がある。
「真白にも、好きなタイプとかあるだろ？　年とか見た目とか性格とか」
「お？　おう」
「それと同じだ。いくら男好きでも、男なら誰でも無差別って訳じゃないだろ」
……まあ、美少年と思われる真白はその限りじゃないかもだけど。王道転校生には、ダイ〇ン並の吸引力があるからな。
「そっか……そうだよな！　無闇に疑っちゃ、逆に失礼だよなっ」
後半、声に出さなかったせいもあり、真白は素直に反省の言葉を口にした。
それに「そうそう」と頷くと、理事長だけじゃなく秘書さんまで俯き、肩を震わせていた。

今の話が濃かったせいか、その後の説明は比較的穏やかだった。
個人的にはＳクラス（家柄と容姿がスペシャル級な生徒の入るクラス）に、何で特待生が入るのかと思ったけど――まあ、ある意味異分子だし。不良の王国Ｆクラスに入らないだけマシだろう。
ちょっと驚いたのは、今回限りだと思ったカード（理事長室他特殊エリアも入室ＯＫ）がそのまま貰えることだった。そんな俺に、理事長が説明してくれる。

「外部生に対する、せめてものフォローだよ。何かあったら、いつでも言いに来なさい」
ワイルドな岡田さんとは、また違う――同じ二十代後半くらいだけど穏やかで優しそうな、貴公子って感じの理事長。そして中性的な、天使みたいな美人の秘書さん。
「ありがとうございます」
俺としてはキャラ立ちした二人を見られただけで十分だったけど、気持ちはありがたく受け取ることにした。
こうして、理事長イベントはつつがなく終了した――と思ってたら、チャイムが鳴った。
「ちょうど良いな、君達の担任を紹介しよう……田辺先生、すぐに理事長室まで」
そう言った理事長の台詞後半が、校内放送で流れる。どうやら明日、登校してからと思っていた担任イベントが始まるらしい。
（まあ、確かに解らないと困る……って、王道通りなら解らなくはないと思うけど）
だって、王道担任って――そこまで考えたところで、理事長室のドアがノックされた。
「田辺です」
「ああ、入りたまえ」
そして入ってきた担任を見て、俺はさっき真白を見た時同様、思わず遠い目になった。
イケメンはイケメンだけど茶髪はキッチリ前髪盛られてるし、シャツワインレッドでノーネクタイだしスーツの前開いてるし――うん、どう見てもホストだ。ホスト以外の何者でもない。
「転入生を紹介するよ、明日からよろしく頼む」
「田辺橙司だ」
「オレ、北見真白。よろしく頼……みますっ」
「谷です」

真白の敬語は、予想通りぎこちなかった。あれ、絶対「頼む」って言おうとしたよな。ごまかそうとして、何かいかつくなったけど。

「……真白。無理に敬語、使わなくていいぞ」

「ありがとな、田辺先生！」

「ああ、あと『お前は』俺のこと、橙司って呼んでいいからな」

心の中でツッコミを入れてると、いつの間にかミラクルが起こっていた。アレかな、変態の時もだけど真白は美形相手でも自然体ってのが、モテ要素なのかな？

（って言うか先生、ドヤ顔されても別に羨ましくないから）

わざわざ『お前は』って強調する辺り、大人気ないって言うか、子供っぽいなぁって思うけど。俺の態度も悪かった（苗字しか名乗ってない）からお互い様だな。

そんな訳で結局、俺は担任に下の名前を名乗らないまま、このイベントを終了した。

さて、次は寮長イベントだが。

本音を言うと、入室カード（寮の鍵も兼用）があるんで、避けられるのなら避けたい。寮長が可愛い子（男）を連れ込んでいちゃついてるとか、本気で見たくない。

（だけど、部屋割があるからな）

流石に、何も知らない転入生同士で同じ部屋にはならないだろう。白月学園の寮は、生徒会と風紀委員、そして寮長以外は二人部屋らしいんで、どうしても入れ替えが必要だ。

「うわ、こっちもデカいな！」

「……ホテルだな」

門や学校同様、いかにも高級な建物に俺達はそれぞれ感想を口にした。うん、まあ、ここまではいいよ。想定内だから。

（転入生来るって知ってるよな、頼むから自重しててくれよ、本っ当頼むから生徒連れ込んで妙なことしてんなよ）

大切なことなんで二回（声に出さずに）言って、俺達は入口近くの寮長室へと向かった。

そして、その部屋のドアをノックしたが――俺の祈りは通じなかったらしく、誰も出てはくれなかった。

（チッ、もげろ）

何が、かは省略で。考えるだけでもウンザリするからな。

「おーい、誰かいないのかー？」

そんな俺の苛立ちを知ってか知らずか、真白がおもむろにドアをノックをした。しかも思いっきり、ガンガン連打で。いいぞ、もっとやれ。

「すまんな、取り込んでたわ」

……そう言って、部屋から出て来た男は上半身裸だった。

そこまでは王道通りだったが、明るい色の髪は濡れていて。

その腕には、同じく濡れた三毛猫と黒猫が抱かれていた――うん、確かに可愛いけど。

（をいをい、新しいな）

取り合えず、さっきの舌打ちと呪いは反省しておこう、うん。

どうやら、猫達の入浴タイムだったらしい。しかも更にもう一匹、ぶち模様の猫も出てきて、寮長らしき人物の足にくっついた。

「……猫？　飼ってんの……ですか？」

「俺だけやなく、野良を寮全体で面倒見てる感じや……って自分、敬語ヘッタやな！　無理せんでえぇよ」
俺とは違い、声に出して尋ねる真白に笑って答える。一瞬、ミラクル再びかと思ったけど、笑顔に変化がないんで断定出来ない。
（変態眼鏡みたいに、作ってる感じはないけど……実は腐男子？　年上だけど爽やか君？　それとも、オカンキャラ？）
王道学園物に出てくるキャラに当てはめていると、首の後ろで束ねた髪同様、明るい茶色の目が俺へと向けられた。
「自分ら、二年の転入生やな。俺は三年で、寮長の仁和浅葱（にわあさぎ）や。よろしゅう頼む」
「おう！　オレは北見真白だっ」
「谷です」
「北見に谷な、うん、よろしゅう」
転校するのって初めてだけど、自己紹介の嵐だな。明日、クラスで自己紹介したら落ち着いてくれるかな。
……何て思いつつ、相変わらず苗字しか名乗らない俺だったけど。
寮長は、ニコニコ笑いながらそう返してくれた――担任より大人だよ。オカン、いや、いっそ女将（おかみ）だな。
「あ、同じ部屋になる奴ら呼ぶから、ちぃと待ってぇな」
そう言うと、寮長はおもむろに電話の子機を手にした。それから、繋がったらしい相手と寮長室へ来るよう話してる。
（ホテルのフロント状態だな）
確かに、これだけ大きな寮だと必要なシステムだろう。そう納得して真白としばし待ってると、待ち人らしい二人がやって来た。

「お前らと同じ二年S組の、杜（もり）と柏原（かしわばら）や」
一人はふわふわの髪と大きな目の、女の子（しかも美少女）にしか見えない男で。もう一人は髪サラサラで、甘めの容姿の爽やか君……。
「キタコレ！　王道転校生だけでもメシウマなのに、平凡まで！　しかも寮長、半裸待機！　あ～、もう俺、萌え死ぬ…いや、でも生徒会との絡みを見るまではっ」
「一茶（いっさ）！」
キラキラと目を輝かせて興奮する爽やか君を、可愛いのが叱り付けた――そうか、いるとは思ってたけどお前が腐男子か。
……王道学園物を読んでいて、思ったことがある。
男同士の恋愛は見る専門って豪語する腐男子だけど、下地があるからか男と恋に落ちる可能性が高いんだ。
（ただ、攻めじゃなく受けになる可能性もあるんだよな）
そして爽やか君は爽やか君で、少々、影が薄い――いや、これは可哀想か。周りがあまりにも濃すぎるんだ。
相手がダイ○ン真白だから、無駄な努力かもしれないけど。
（腐男子と爽やか君は、話がとっちらからないようパセリ（彩り）要員にって思ってたんだよな）
うん、と心の中で頷いた俺の前で二人が自己紹介する。
「杜奏水（かなみ）です、よろしくね」
「柏原一茶、ようこそ王道学園へ……っ痛っ！」
「煩いけど、悪い奴ではないから安心してね」
両手を広げた腐男子の後頭部を、可愛いのが笑顔のまま殴った。うん、ナイスボケツッコミ。
「……二兎を追う者は、一兎をも得ず」

「っ!?」
ボソリ、と俺が呟いたのに腐男子が反応した。俺の肩を掴み、真白達から離して尋ねてくる。
「何、君、もしかしてお仲間？」
「いや。ただ、王道転校生総受けが見たいだけだ」
「えっ？　腐ってないのに？」
「知り合いが、推してるんだ」
嘘じゃない。桃香さんが（新作として）推してるからな。
「そっかぁ……王道君、アンチじゃない？」
「あぁ、ちゃんと苗字で呼んでくれてる」
「本当に君、腐ってないの？　まぁ、でもそれなら良いかな」
そう言うと腐男子は寮長へと目をやり、笑顔で手を挙げた。
「俺、この転校生と同室になりますっ」
「そうか？　谷は良いんか？」
「はい」
「一茶、転校生に迷惑かけちゃ駄目だよ……よろしくね、真白」
「オレこそ、よろしくな奏水っ」
穏便に話がついただけじゃなく、いつのまにか可愛いのと真白が仲良くなっていた。
それを見て、腐男子が「姫カップル！」と喜んでいる。そんな面々を見ながら、俺は思った。
……物語世界ならともかく、俺には魔法使いみたいに何でも出来る訳じゃない。
だけど魔法が使えないシンデレラが継母や姉達の為、ドレスを作って舞踏会に送り出したみたいに――俺も、

頑張ってやるよ。

（ただし、俺は舞踏会へは行かないけどな？）

灰かぶり君 =前篇=

発行日　2022 年 5 月 27 日

著者　渡里あずま（表紙　inika）
https://www.pixiv.net/member.php?id=45432486
連絡先　contact@rainbow.sakura.ne.jp
印刷　シメケンプリント / Adobe Stock

Generated by pixiv
本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。